松支図書館だより３月号

平成２８年３月１日
熊本県立松橋支援学校図書館発行

弥生・・・３月の別称。「弥」にはいよいよやますますという意味があり、草や木が盛んに生い茂るという「草木弥生月」が、略されたといわれています。生き物たちが、長い冬から目覚め陽光満ちる、うららかな季節になりました。

さて卒業生の皆さん、ご両親や先生方、出会った人に感謝の気持ちを忘れず自分の“夢”をあきらめないで、これからの長い人生を歩んでいって欲しいと願っています。

【人権の学習に役に立つ本です！】

	書　　名	著　　者	出　版　社
１	人権の絵本３　それって人権	喜多　明人	大月書店
２	人権の絵本４　わたしたちの人権宣言	喜多　明人	〃
３	人権の絵本５　タイムタラベル人権号	満川　尚美	〃
４	人権の絵本６　学びの手引き	岩辺　泰史	〃
５	いじわる　　ちゅうりっぷえほんシリーズ	せな　けいこ	すずき出版
６	ひとりでがまんしないよ	嶋崎　政男	あかね書房
７	わたしからありがとう	中島　啓江	岩崎書店
８	ルーシーといじめっこ	アレクサンダー・Ｋ	ＢＬ出版
９	いじめの中で生きるあなたへ	小森　美登里	ＷＡＶＥ出版
１０	１４歳とタウタウさん	梅田俊作／桂子	ポプラ社

※平成２７年度本校は県立学校等人権教育研究協力校に指定されています。その助成金で上記の本１０冊を購入することができました。児童生徒のみなさんの人権学習やいじめ撲滅に向けての学習等に役だてて欲しいものです。

☆★☆★☆【最近読んだ、こころに残った本】を紹介します！☆★☆★☆

『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』向野　幾代著　産経新聞出版

お母さんへのすべての感謝を一篇の詩に凝縮させて二カ月後、生まれながらにして重度の脳性マヒだった奈良県の少年やっちゃんは天国に旅立ちました。やっちゃんを見守ったすべての人の愛と涙に溢れた珠玉の一冊です。「お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい」こんな悲しいことを言わせない世の中であってほしい！！（図書館に著者直筆色紙があります）

《著者：向野幾世さん紹介》

昭和１１（１９３６）年、香川県生まれ。奈良女子大学文学部卒。国立教護事業職員養成所修了。肢体不自由児施設指導員や奈良県立明日香養護学校教諭、奈良県立障害児教育センター所長、西の京養護学校長、奈良県立教育研究所障害児教育部長などを歴任。

☆★☆　リレーエッセイＮＯ４８　☆★☆

「本にも『運命の出会い』が」

私が初めて文庫本を読んだのは、小学校高学年の夏休みでした。「小さい文字の本は大人が読む本だ」と考えていた私は、読書は漫画や絵本を読むくらいで、休みの日は友達とドッチボールやかくれんぼ、自転車で遠くに出掛けるなど、体を動かして遊ぶことの方が好きでした。そんな私の夏休みは部活のバスケットボールした後プールで泳いだり、友達と遊びに行ったりといった毎日でした。しかし、夏休みも後半になり、やり残していた宿題が「おいでおいで」と手招きします。楽しかった日々も、もう終わり。「嫌だなぁ」と思いながら少しずつ宿題を終わらせていきました。

中でも一番やっかいなのが「読書感想文」でした。小学校高学年になってくると、読書感想文のために読む本を選ぶのが難しくなります。女子の中には学校の休み時間に小説を読んでいる子もいました。周りの友達も少しずつ「ズッコケ３人組」や「学校の怖い話」など物語を読むようになっていました。遊んでばかりの私も「今までのような絵本じゃみんなに笑われるんじゃないか」と思うようになっていました。しかし、いざ本を読もうと思っても何を読んだらいいかわからない。焦った私は母親に相談しました。「とにかく本屋さんに行ってみよう」と言われて、母親と一緒に本屋さんに行きました。

ちょうど私を待っていたかのように「読書感想文にオススメの本」と書かれたコーナーがあり、たくさんの本が置かれていました。「難しいのは嫌だなぁ」と思いながらいろいろな本を少しずつ読んでみるのですが、なかなか読めそうな本はありません。「やっぱり無理だ」と諦めかけた時に、かわいいネコのイラストが描かれた本が目に入りました。私は小さいときから動物が好きだったので「ネコの話なら読めるかも」と思い、その本を買いました。その本は群（むれ）ようこさんの「トラちゃん」という本でした。群さんが幼少期から飼ってきた様々なペットの生態や一緒に暮らすことの楽しさをたくさんの話で紹介されていて、とても読みやすく、面白い本でした。

その１冊で群さんのファンになった私は、群ようこさんの本をお小遣いから買って読むようになりました。１冊読み終えると自分の本棚に置き、その本が１冊、また１冊と増えていく楽しみもあり、どんどん読むようになりました。今ではいろんな作家さんが書いた本を読むようになりましたが、私に読書の楽しみを教えてくれたのは夏休みの読書感想文を書くために買った、たった１冊の本でした。

人生には、「運命の出会い」というものがあると思います。それは人だけではありません。洋服や靴、財布にシャープペンなど、「自分にピッタリ」という物がありますよね。もちろん本にも「自分にピッタリ」があります。みなさんも「本は疲れるし嫌いだ」と思わずに、あなたの「運命の出会い」となる本を探しに図書室へ行ってみませんか？きっとそこには「運命の１冊」が待っていて、あなたの世界を広げてくれると思います。

※群ようこさんの作品「あたしが帰る家」が図書館にあります！